

【一】<sup>0</sup>一<sup>1</sup>丁<sup>2</sup>下<sup>3</sup>三<sup>2</sup>

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
一	イチ イツ ひと ひとつ	一 一 一	一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一 一 一	一	一
教1常①		甲骨 毛公鼎 郭店楚簡	説文篆文	馬王堆 乙瑛碑 十七帖	關帝序	高貞碑 九成宮	五經・序	那須國造碑	
			一	一					
			一	一					
			一	一					
七	シチ なな ななつ なの	十 十 十	七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七 七 七	七
教1常①		甲骨 金文 睡虎地秦簡	説文篆文	居延漢簡 乙瑛碑 十七帖	集字聖教序 孫秋生造像 孔子廟堂碑	五經・序	稲荷山鉄剣		
			七	七					
			七	七					
			七	七					
丁	チョウ テイ	口 口 口	丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁 丁 丁	丁
教3常①		甲骨 金文 包山楚簡	説文篆文	居延漢簡 禮器碑 孫過庭	智永	張猛龍碑 皇甫誕碑	九經・序	聖武天皇筆集	
			丁	丁					
			丁	丁					
			丁	丁					
下	カ・グ おろる・おろ す・くださる・ くだす・きがる・ さげると た・しも・も	下 下 下	下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下 下 下	下
教1常①		甲骨 欽段 包山楚簡	泰山刻石	馬王堆 禮器碑 十七帖	集字聖教序 魏靈藏造像	九成宮	五經・序	法華義疏	
			下	下					
			下	下					
			下	下					
三	サン みみつ みつつ	三 三 三	三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三 三 三	三
教1常①		甲骨 大孟鼎 睡虎地秦簡	説文篆文	居延漢簡 乙瑛碑 十七帖	集字聖教序 張猛龍碑	九成宮	五經・序	法華義疏	
			三	三					
			三	三					
			三	三					
上	ショウ・ジョウ あがる・あげ る・うえ・う わ・かみ・の ぼす・のぼ る・のぼる	上 上 上	上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上 上 上	上
教1常①		甲骨 戦国・金文 包山楚簡	説文篆文	馬王堆 乙瑛碑 十七帖	集字聖教序 始平公造像	九成宮	五經・序	法華義疏	
			上	上					
			上	上					
			上	上					

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
一	一	一	一	一			一	一	一	一	一	一
屏風土台	節用	一〇										現代中国
		式										
		古文										
七	七	七	七	七			七	七	七	七	七	七
益田本白詩	節用	一										現代中国
丁	丁	丁	丁	丁			丁	丁	丁	丁	丁	丁
藤原頼道	暦日	一										現代中国
下	下	下	下	下			下	下	下	下	下	下
三体白詩	節用	二										現代中国
		丁										
		古文										
		二										
		古文										
三	三	三	三	三			三	三	三	三	三	三
屏風土台	節用	二										現代中国
		式										
		古文										
上	上	上	上	上			上	上	上	上	上	上
屏風土台	節用	二										現代中国
		上										
		古文										
		二										
		古文										

【七】「十」と字体衝突した結果、縦線を曲げるようになる。  
当用漢字字体表では康熙字典や当用漢字表と同じように最終  
画を上にはねているが、教育漢字は止めている。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

【一】<sup>2</sup>丈<sup>2</sup>与<sup>3</sup>丑<sup>3</sup>不<sup>4</sup>且

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
丈	ショウ たけ		𠄎	𠄎	𠄎		丈	丈	丈
丈	③		𠄎	𠄎				丈	丈
万	マン ばん よろず	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
萬	マン ばん よろず	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
与	ヨ あたえる あずかる くみする		与	与	与	与	与	与	与
與	あたえる あずかる くみする	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
与		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
丑	チュウ うし	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
丑	④		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
不	フブ ず	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
不	教4常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
且	カツ しばらく まさに	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
且	常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

【丈】「支」と字体衝突し、漢代に字体を変更する。「丈」の点は「咎なし点」で付けても付なくても良い。

【万】「万」と「萬」は別字だが古くから通用し、干祿字書も両方とも「正」とする。「萬」の居延漢簡の草書体が「万」に変化したとする説もあるが、「万」は居延漢簡の時代より

も前の戦国時代から使われており時代が合わない。もう一つ関連する文字に「卍」がある。この字も「マン」と読む。「マン字」が「マンジ」になったようだ。

【与】「與」とは別字だが通用する。多くの漢和字典では「一」の2画だが、康熙字典では「一」の3画で、字体も異なる。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊ちやん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈
丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈	丈
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万
萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬	萬
与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与	与
與	與	與	與	與	與	與	與	與	與	與	與	與
丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑	丑
不	不	不	不	不	不	不	不	不	不	不	不	不
且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且	且

最終画の横線が右に突き出るのは江戸以降か。拓本の干祿字書は不鮮明なので江戸期の版本をあげる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文篆文 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
丘	キュウ おか								丘 五経<説文> 王勃詩序
									丘 五経<石経>
									丘 江戸五経<石経>
世	セイ よ								世 九経字様 豊替指歸
世	教3常①								世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									世 九経字様 豊替指歸
世									



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
之	シの これ ゆく 人①								
乎	コ 人①								
乍	ながら ①								
乏	ボウ とぼしい 常①								
乗	ジョウ のせる のる 教3常①								
乙	オツ おつによ う きのと 常①								

【之】説文の字体に対応する明朝体の字体が康熙字典では古文になっている。隸書以降の字体は里耶秦簡の字体を元にしたものか。

【乏】説文篆文の字体が左右反転しているようだ。五経文字には「乏」一例しか載っていないが、九経字様で説文篆文に

従った字体が追加されている。

【乗】唐代の正字である開成石經(楷書)と清代の正字である康熙字典(明朝体)の字体が異なる。正(統)字体の根拠である説文篆文と較べればどちらもおかしい。夏目漱石は伝統的な楷書/行書の字体を書いているが、太宰治は康熙字典/文部

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
之												之 現代中国
乎												乎 康熙<古文> 現代中国
乍												乍 現代中国
乏												乏 五経文字 現代中国
乗												乗 現代中国
乙												乙 現代中国

省活字の字体の影響を受けているようだ。

【乙】ZのようになつたりLのようになつたりする。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
九	ク キウ このここのつ								聖武天皇雜集
乞	キツ コイ こう								聖武天皇雜集
也	ヤ ナリ ヤ								王勃詩序
乱	ラン みだす みだれる おさめる みだれ								王勃詩序
亂	② ラン おさめる みだす みだれる わたる								光明皇后業藏
乳	ニウ ウチ								王勃詩序
乾	カン かわかす かわくい ぬい								王勃詩序
了	リョウ おえる おわる さとの								蜀玉集
予	ヨ あづかる あづける あたえる あらかじめ わら								伝空海急就草

【乞】「气」と同字とする字書と別字とする字書があるが、本書では別字とした。  
 【也】説文に2種があり、康熙字典では片方が古文。ならば睡虎地秦簡の字体も古文ということになる。  
 【亂(乱)】「乱」は干禄字書と康熙字典に「亂」の俗字として掲

載。私見では「乱」は「亂」の略字で、「亂」の「ム」の部分  
 が「乱」の口だと思ふ。日本では上代以降「亂」と「乱」の  
 両方が使われるが、江戸時代になると「乱」が多く使われ、  
 繁体の「亂」の使用例がみつからない。文部省活字は「亂」。  
 文部省活字の影響を受けていると思われる太宰治も「乱」を

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
九	九	九	九	九			九	九		九	九	九 現代中国
乞	乞	乞	乞	乞			乞					乞 干禄<俗> 現代中国
也	也	也	也	也			也					也 現代中国
乱	乱	乱	乱	乱	乱	乱	亂	乱	乱	乱	乱	乱 江戸干禄<俗> 現代中国
亂	亂	亂	亂									亂 干禄<俗>
乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳 現代中国
乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾	乾 干禄<俗> 現代中国
了	了	了	了	了	了			了	了	了		了 干禄<通> 現代中国
予	予	予	予	予				予	予	予	予	予 現代中国

書き、「亂」は書いていない。  
 【乾】現代中国ではこの字をqianと読むときは「乾」を使い、  
 ganと読むときは「干」を使う。  
 【予】別字だが「豫」と通じる。太宰治は「豫感」と書いて  
 いる。九経字様の字体は楷書とは思えないが、これが正字。代

中国では「予」と「豫」を統合していない。  
 ※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
豫	ヨ あらかじめ								聖武天皇複製
争	ソウ あらしう いかでか								瑠玉集
争	ソウ あらしう いかでか								響替指歸
事	シズ こと つかえる								王勃詩序
事									
二	ニ ふた ふたつ								王勃詩序
井	ショウ セイ い								王勃詩序
井									
云	ウン い								王勃詩序
雲	ウン くも								王勃詩序
雲									
雲									

【争】「争」が正(統)字体とされているが、行書や楷書では「争」「争」両方が書かれている。横線が右に出るものと出ないものがある。漱石も太宰も横線を右に出していない。睡虎地秦簡の上部も「日」のようだが、傾いているから「爪」なのだろう。漢代には上部を完全に「日」に作る字体がある。

書譜の字体も「日」をくずしているように見える。  
【事】「事」と「事」の差は「口」が点々に略されるだけで大きな問題ではない。下から2本目の横線が漢代までは右に出ているが、南北朝以降は出なくなる。九経字様、康熙字典など正字では出る。弘道軒も漱石も太宰も出していない。漱石は

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫	豫
争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争	争
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井
云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云	云
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲

ほとんど草書を書くが、まれに楷書・行書の字体を書く。  
【予】説文篆文と泰山刻石の字体が異なるが、もちろん泰山刻石が正しいのだろう。  
【井】説文篆文には点がある。  
「刑」の初文が「井」なので字体の衝突を避けるために「井

戸」の「井」の方に点をつけて「井」にしたともいう。  
【云】「雲」の元の字で、後に「雨」を加えたという。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
亥	ガイ 人①								元暦萬葉① 節用
交	コウ かわす まじえる 教2常①								元暦萬葉② 節用
亦	エキ また 人①								元暦萬葉④ 節用
亨	キョウ コウ とおる 人①								後伏見天皇 節用
亨	キョウ うける 常①								藤原朝隆 宝抓取

【亥】説文古文の字形が異なる異本がある。

【交】「一」の下に「火」を書く字体あり。江戸では「一」の下に「火」を書く字体あり。漱石は複数の字体を書く。

【亦】魏霊蔵造像記と聖武天皇雑集(下)は「一」を「ク」の形に書くが、これは虚画の左払いを実画として書いたものか。

康熙字典の古文の字体は古代の例に見えない。

【亨】【享】「亨」と「享」を古代から別字としている字典と、元は同字で後に使い分けが生じたとする字書がある。『康熙字典』、『角川書道字典』、『新書源』(二玄社)は前者であり、その他多くの字典や漢和辞典は後者。本書では前者の説を採つ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												亥 現代中国
												交 現代中国
												亦 現代中国
												亨 現代中国
												亨 現代中国

だが確証はない。後藤朝太郎『教育上より見たる明治の漢字』には「亨」の許容字として「享」を掲載している。字の上部は古代はやくら(梯子)なのだが、説文篆文で突然「口」になる。これは「高・高」と同様だ。南北朝以降は梯子に戻り、干禄字書も梯子だ。その字体が日本に伝わる。江戸になると

また「口」に戻る。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
京	キョウ ケイ みやこ	京	京	京	京	京	京	京	京
京	キョウ みやこ	京		京			京	京	
亭	テイ あずまや とどまる		亭	亭	亭	亭	亭	亭	亭
			亭	亭					
			亭	亭					
亮	リョウ		亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮
人	ジン ニン ひと	人	人	人	人	人	人	人	人
介	カイ おおきい すけ たすける はさむ	介	介	介	介		介	介	介
			介	介	介		介	介	
仇	キョウ あだ かたぎ		仇	仇	仇		仇	仇	仇
							仇		
今	コン キン いま	今	今	今	今	今	今	今	今
		今	今	今	今	今	今	今	今

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
京	京	京	京	京	京		京	京	京	京	京	京
	京			京								京
	京			京								京
	京			京								京
亭	亭	亭	亭	亭	亭		亭	亭	亭			亭
	亭			亭								亭
	亭			亭								亭
	亭			亭								亭
亮	亮	亮	亮	亮			亮					亮
	亮			亮								亮
	亮			亮								亮
	亮			亮								亮
人	人	人	人	人	人		人	人	人	人	人	人
	人			人								人
	人			人								人
	人			人								人
介	介	介	介	介	介		介	介	介	介		介
	介			介								介
	介			介								介
	介			介								介
仇	仇	仇	仇	仇			仇					仇
	仇			仇								仇
	仇			仇								仇
	仇			仇								仇
今	今	今	今	今	今	今	今	今	今	今	今	今
	今			今								今
	今			今								今
	今			今								今

【京・京】前漢以降、「口」を書かずに「日」を書く。江戸干禄は「京」を〈通〉とし、九経字様は〈訛〉とする。江戸以降、「口」を書くのは『干禄字書』や『康熙字典』の出版による影響か。康熙字典では「京」は「原」の俗字。  
【亭】漱石は「口」、「はしご」、「草書」の3体を書いている。

【亮】説文の大徐本にはなく、段注本で補われている字。甘谷漢簡、楊貴氏墓誌、文部省活字の足が「几」の形。五車韻府、美華書館、築地二号の活字もこの字体。  
【介】「分」と似た字体になるため、書き順と字体を変えたのか。江戸では節用の字体が一般的。弘道軒はそれを採用。

【今】将棋駒の「歩」の裏側は「金(キン・コン)」と音が同じ「今(キン・コン)」の草書を宛てたものだという。(増川2000)

【人】<sup>2</sup>仕<sup>2</sup>仁<sup>2</sup>以<sup>3</sup>仕<sup>3</sup>仔<sup>3</sup>仙

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期				
仕	シュウ ①		仕 睡虎地秦簡	仕 説文篆文	仕 居延漢簡	仕 張景造土牛碑	仕 元暉墓誌	仕 道因法師碑	仕 王勃詩序				
仁	ジン ニ 教6常①	仁 甲骨	仁 中山王鼎	仁 包山楚簡	仁 説文篆文	仁 馬王堆	仁 曹全碑	仁 十七帖	仁 集字聖教序	仁 張猛龍碑	仁 孔子廟堂碑	仁 王勃詩序	
			仁 郭店楚簡	仁 睡虎地秦簡	仁 説文篆文	仁 馬王堆							
			仁 郭店楚簡	仁 説文篆文	仁 居延漢簡								
仏	ブツ ほとけ 教5常①		佛 説文篆文				佛 集字聖教序	佛 牛闕造像記	佛 雁塔聖教序	佛 聖武天皇雜集			
佛	人②						仏 比丘尼道慧	仏 御注金剛經	仏 聖武天皇雜集				
以	イ おもう もちいる 教4常①	以 甲骨1	以 散氏盤	以 睡虎地秦簡1	以 説文篆文	以 馬王堆	以 乙瑛碑	以 十七帖	以 集字聖教序	以 鄭義下碑	以 孔子廟堂碑	以 干祿・序	以 王勃詩序
目	イ ④	目 甲骨2	目 毛公鼎	目 睡虎地秦簡2	目 説文篆文	目 敦煌漢簡	目 北海相景君碑	目 馬季華墓誌					目 現代中国
已	イ すでに のみ はなはだ やむ ②	已 甲骨3	已 石鼓文	已 包山楚簡	已 説文篆文	已 居延漢簡	已 乙瑛碑	已 書譜	已 王獻之	已 高貞碑	已 孔子廟堂碑	已 聖武天皇雜集	已 現代中国
仕	シ つかえる 教3常①		仕 戦国・金文	仕 説文篆文		仕 孔宙碑	仕 龔龍頤碑	仕 温彦博碑	仕 江戸干祿・序	仕 王勃詩序			仕 現代中国
						仕 張表碑					仕 杜家立成		
仔	シ 人①	仔 甲骨	仔 金文	仔 説文篆文									仔 現代中国
仙	セン セント 常①			仙 説文篆文		仙 智永千字文	仙 集字聖教序	仙 論經書詩	仙 孟法師碑	仙 江戸五経	仙 聖武天皇雜集		仙 現代中国
僊	セン ②			僊 説文篆文	僊 尹宙碑	僊 西嶽華山廟碑		僊 陽鳳墓誌	僊 江戸五経	僊 聖武天皇雜集			僊 現代中国

【仏・佛】「仏」は遅くとも南北朝の頃には使われていた。日本では「仏・佛」両方が使われてきた。康熙字典では「仏」は「佛」の古文となっているが、実資料は見えない。  
【以】「以」と「目」は異体字。「已」は「以」、「目」と音も意味も似ているが「すでに」「やむ」という意味もある。「目」は

丸い刃がある鋤のような農機具だという。「以」は、「目」に「人」を加えた字だとされ、甲骨1はそのように見える。だが睡虎地秦簡1や馬王堆の字形は、人には見えない。もししたらこれは鋤を横から見た形で、「人」とされる部分は鋤の把手なのではないだろうか。「已」は「目」を天地逆さにし、鋤

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
仕	仕	仕	仕				仕					仕 現代中国
仁	仁	仁	仁	仁			仁	仁		仁	仁	仁 現代中国
		恚										
		𠂔										
佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛	佛		佛	佛	佛 現代中国
仏	仏	仏	仏									仏 現代中国
以	以	以	以	以			以	以	以	以	以	以 現代中国
		目										目 現代中国
已	已	已	已	已			已					已 現代中国
仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕	仕 現代中国
		仕										
	仔	仔	仔	仔			仔					仔 現代中国
仙	仙	仙	仙	仙	仙	仙	仙	仙	仙			仙 現代中国
		僊										僊 現代中国

の刃を上に向けるので、「(仕事を)「やむ」という意味を持ったのではないだろうか。「已」は漢代から唐代までは「巳」と字体が衝突していた。  
【仕】旁は「土」と「士」の2種類がある。隸書は「土」が多数。北魏の楷書は「土」が多数。唐代楷書は「土」が多数。

日本では江戸時代まで「土」が多数。正字は「土」。弘道軒は「土」のみ。漱石は「土」と「士」の両方を使用。  
【仔】甲骨では「保」と字体が衝突している。漢代以降、中国での使用例が見えない。日本では江戸期に突然出現。  
【仙】説文では「僊」。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
他	タ ほか		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
佗								𠂔	
代	タイ・ダイ かえる かわる しる よ	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
付	フ つく つける	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
令	レイ しむ	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
		𠂔	𠂔	𠂔					
伊	イ かれ これ	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
		𠂔	𠂔	𠂔					
仮	カ ケ かり		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
假	カ ケ かり ②			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	
会	カイ エ あつまる かならず	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
會	エ カイ あつまる たまたま	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
企	キ くわだてる 常①	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
		𠂔	𠂔				𠂔	𠂔	

【他】異体字の「佗」は包山楚簡の字体と一致する。  
 【令】隸書や初唐の楷書では最終画が縦線。戦国古璽では「令」に「口」を加えて「命」とすることもあったらしい。  
 【仮】康熙字典には「佞」と「假」は別字として載っているが、それとは別に日本では「假」の草書からできた「仮」が

あり、字体衝突した。江戸版本では「佞」と「假」の使用頻度は半々ぐらいいである。中国では現在も「佞」と「假」は別の字種。  
 【会】常用漢字の字体は草書かできたものと思われる。五経文字に、説文篆文に忠実な字体と石経の字体の両方がある。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
他	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔
			𠂔									
代	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔
付	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔
令	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔
伊	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	𠂔				𠂔
			𠂔									
仮	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
			𠂔									
会	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔
			𠂔	𠂔	𠂔		𠂔					𠂔
企	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔			𠂔	𠂔		𠂔		𠂔
	𠂔		𠂔									

【企】漢から南北朝時代ごろまでは下部を「止」ではなく「山」を書いていたらしい。王羲之も「山」を書いてる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伎	キギ わざ たくみ		伎	伎	伎	伎	伎	伎	
新①			説文篆文	禮器碑	李懷琳絶好書	晋張猛本裴敦	世説新書	干祿字書	
休	キウウ やすまる やすむ やすめる いこう	休	休	休	休	休	休	休	休
教1常①		甲骨	史頌殷	中山王方壺	説文篆文	居延漢簡	石門頌	淳化閣帖	興福寺断碑
	やめる	休	休	休	休	休	休	休	休
		甲骨	新蔡葛陵楚簡	説文篆文	敦煌漢簡		然	休	休
							然	休	休
							然	休	休
							然	休	休
仰	ギョウ コウ あおく おおせ		仰	仰	仰	仰	仰	仰	仰
常①			説文篆文	居延漢簡	史晨前碑	淳化閣帖	集字聖教序	張猛龍碑	等慈寺碑
							仰	仰	仰
							仰	仰	仰
							仰	仰	仰
件	ケン くだり くだん		件				件	件	件
教5常①			説文篆文				件	件	件
							件	件	件
伍	ゴ	伍	伍	伍	伍	伍	伍	伍	伍
人①		古璽	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	説文篆文	居延漢簡	張景造土牛碑	唐太宗屏風書	饒龍顔碑
							伍	伍	伍
							伍	伍	伍
							伍	伍	伍
仲	チュウ なか	仲	仲	仲	仲	仲	仲	仲	仲
教4常①		散氏盤	古璽	説文篆文	居延漢簡	曹全碑陰	賀知章孝経	王獻之	鄭義下碑
							仲	仲	仲
							仲	仲	仲
							仲	仲	仲
伝	デン つたう つたえる つたわる	伝	伝	伝	伝	伝	伝	伝	伝
教4常①		甲骨	金文	睡虎地秦簡	説文篆文	馬王堆	張景造土牛碑	書譜	集字聖教序
							伝	伝	伝
							伝	伝	伝
							伝	伝	伝
傳		傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳
人②		散氏盤	包山楚簡	居延漢簡	乙瑛碑	興福寺断碑			
							傳	傳	傳
							傳	傳	傳
							傳	傳	傳
任	ニン まかす まかせ たえる	任	任	任	任	任	任	任	任
教5常①		甲骨	金文	睡虎地秦簡	説文篆文	居延漢簡	禮器碑陰	十七帖	王獻之
							任	任	任
							任	任	任
							任	任	任
							任	任	任

【伎】干祿字書では「技」の〈通〉、つまり「技」の異体字として扱われている。行書、楷書では各無し点が付くことあり。  
【休】説文篆文に「广」がついた字体があるが、これに一致する例が見えない。南北朝時代は下に横線やれっかがつく。王羲之も興福寺断碑で横線付きの字体を書いている。唐代の楷

書では横線がつくのは度人経1例だけ。日本の上代は横線つきも書かれる。干祿字書では横線つきの字体を〈俗〉としているが、康熙字典にはない。手書きでは各無し点がつくことが多い。北魏ではギョニンベンを書くことあり。  
【仰】傍の「印」が「印」と書かれることがある。手書きでは

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
	伎	伎					伎	伎				伎
	節用	人4										干祿(技)の通 現代中国
	保	体	休	休	休		休	休	休	休	休	休
	近衛本明詠	節用	人4									江戸干祿(通) 現代中国
	休	体										
	枯葉本明詠	女用文章										
	仰	仰	仰	仰	仰		仰	仰	仰	仰		仰
	金剛山經韻文	節用	人4									現代中国
	仰											
	元暦萬葉①											
	件	件	件	件	件		件	件	件	件	件	件
	元暦萬葉②	節用	人4									漱石 現代中国
	伍	伍	伍	伍	伍		伍				伍	伍
	尊門親王	人4										室町 尊門親王 現代中国
	仲	仲	仲	仲	仲		仲	仲	仲	仲	仲	仲
	元暦萬葉②	節用	人4									現代中国
	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳	傳
	元暦萬葉②	節用	人11								陸軍	現代中国
	傳		伝	傳								
	消息往来											
	任	任	任	任	任		任	任	任	任	任	任
	元暦萬葉②	節用	人4									現代中国
	任	任										
	墨流本明詠	算地方大成										

多くの場合「印」の1画目が左から右に書かれる。各無し点がつくことあり。文部省活字の字体は奇異に感じる。  
【伝】この字種は、繁体と略体、正字と通用字、楷書と明朝体による字体の違いがよくわかる。現代中国の簡体字は草書の字体。「伝」はなぜこう略すかわからない。

【任】中国の古代から日本の江戸時代まで正字も含めて傍は「壬」ではなく「王」とする例が多い。「王」だとしても1画目は左から右に書くことが多い。殷代は「王」でなく「工」。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
伐	バツ うつきる ほこる 常①								法華義疏
伏	フク ふす ふせる したかう 常①								王勃詩序
位	イ くらい 教4常①								聖武天皇雜集
何	カ なに なん いずれ 教2常①								王勃詩序
									風信帖
伽	カ き とぎ 人①								豊替指歸
佐	サ すけ たすける 常①								聖武天皇雜集
									趙志集
作	サク サ つくる なす 教2常①								王勃詩序
									空海 金剛般若經問答
伺	シ うかがう 常①								王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
伐	伐	伐	伐				伐	伐		伐		伐 現代中国
伏	伏	伏	伏	伏			伏	伏	伏	伏		伏 現代中国
位	位	位	位	位			位	位	位	位		位 現代中国
何	何	何	何	何			何	何	何	何	何	何 漢・居延漢簡 現代中国
				何								何 漢・居延漢簡 江戶・五条裕誠集
伽	伽	伽	伽				伽	伽				伽 現代中国
佐	佐	佐	佐	佐			佐	佐	佐	佐		佐 北宋・蔡京 現代中国
												佐 後漢・嵩山 少室石闕銘 奈良・聖武天皇 勅書副版
作	作	作	作	作			作	作	作	作		作 現代中国
伺	伺	伺	伺	伺			伺	伺	伺	伺		伺 現代中国

【位】 金文、古璽の字体は「立」だけでニンベンがない。

【作】 甲骨ではニンベンがない。漱石は草書の字体も使う。

【何】 甲骨と金文の字体は「何」とは違う系統か。

【佐】 説文に解説がない。そのためか干禄字書、五経文字、九経字様、開成石経のいずれにも見えない。「工」が「匕」になる異体字は中国の南北朝の頃から。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
低	テイ ひくい ひくまる ひくめる 教4常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
							𠄎	𠄎	
伯	ハク おさ 常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
伴	ハン バン ともなう とも 常①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
佑	ユウ たすける 人①		𠄎	𠄎	𠄎				
余	ヨ あます われ 教5常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
		𠄎	𠄎	𠄎					
		𠄎	𠄎	𠄎					
		𠄎	𠄎						
餘	②		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
				𠄎	𠄎	𠄎			
伶	レイ 人①		𠄎				𠄎	𠄎	𠄎
依	イエ 常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎				

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
低	低	低	低	低			低	低	低	低	低	低
低	低	低	低	低								低
伯	伯	伯	伯				伯	伯		伯		伯
伴	伴	伴	伴				伴	伴	伴	伴		伴
佑	佑	佑	佑				佑					佑
余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余	余
							余					
餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘	餘		余
伶	伶	伶	伶									伶
依	依	依	依	依	依		依	依	依	依		依

【低】説文の原本にはなかったらしく、徐鉉による説文(大徐本)に新附字として掲載されている。唐代正字もない。旁が「互」の字体もある。隸書に旁が「皇」に似た字体のものがある。現代中国では最終画は横線ではなく点。

【伯】西周まではニンベンがなく「白」だけ。

【佑】説文篆文ではニンベンがない。平安中期の桂宮本万葉、江戸期の大日本永代節用無尽蔵、ともに旁の「右」は、横線を先に書いている。

【余】「余」と「餘」は本来は別の字だが、通用する。漱石が両方の字体を書いているのには驚いた。使用例は「持て余し

ている」、「餘り気の毒だから」、「汽車が余っ程動き出して」、「学資の餘りを」、「余っ程上等だ」、「余計な手数だ」、「余計な減らず口」、「年中持て余して」、「餘り上品ぢやないが」、「餘っ程えらく」、「余っ程辛防強い」、「蚊が餘っ程刺した」、「余計な発議」……さて使い分けの基準はあるのだろうか。

【依】甲骨、金文では人は左側ではなく「衣」の中にある。中にいる人は、右向き、左向き、正面の3種類。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
侍	シ さむらい はべる		侍	侍	侍	侍	侍	侍	侍
倂	フ あなどる		倂	倂			倂	倂	倂
併	ヘイ あわせる しかし ならぶ		併				併	併	併
例	レイ たとえる たとえ		例				例	例	例
俄	ガ にわか		俄				俄	俄	俄
係	ケイ かかり かかわる つなぐ		係	係	係	係	係	係	係
侯	コウ きみ これ		侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯
侯			侯	侯	侯	侯	侯	侯	侯

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
侍	侍	侍	侍			侍	侍		侍		侍
	倂	倂	倂			倂	倂	倂	倂		倂
	併	併	併			併	併		併		併
	例	例	例			例	例		例		例
	俄	俄	俄			俄	俄		俄		俄
	係	係	係			係	係	係	係		係
	侯	侯	侯			侯	侯		侯		侯

【侍】江戸版本では草書が多く使われ、行書は少ない。  
 【併】4種類の正字の字体がそれぞれ違う。  
 【係】傍の一面目が略されることあり。節用と弘道軒は傍の一面目を左から右に書いている。  
 【侯】古代の字は「尸+矢」で「尸」は後に加わる。「尸」の

左ハライと「尸」の縦線が合わさってニンベンになる。「侯」が正(統)字体、「侯」の「矢」が「夫」になった字体が通(用)字体。『陸軍幼年学校用字便覧』では「侯」を〈本字〉としている。弘道軒四号には「侯」がみつからない。弘道軒三号には「侯」がある。弘道軒2は異体字だろうか？

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俊	シュン すぐれる 常①		俊	俊	俊	俊	俊	俊	俊
僂				僂			僂	僂	
信	シンのばすのびるまかせるまこと 教4常①	信	信	信	信	信	信	信	信
		信	信	信	信	信	信	信	
		信	信	信	信	信	信	信	
侵	シン おかす 常①	侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵
		侵	侵	侵	侵	侵	侵	侵	
促	ソク うながす せまる 常①		促	促	促	促	促	促	促
俗	ソク ならわし 常①	俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗
		俗	俗	俗	俗	俗	俗	俗	
便	ベン ピン たよ りすな わち 教4常①	便	便	便	便	便	便	便	便
保	ホ ホウ たも つ やす じる 教5常①	保	保	保	保	保	保	保	保
		保	保	保	保	保	保	保	
		保	保	保	保	保	保	保	

【俊】五経文字では「俊」と「僂」は異体字。康熙字典では「俊」と「僂」は別に掲載されているが、「僂」の説明に「同俊」とある。「僂」は説文には見えない。「俊」は干禄字書には見えない。  
【信】 傍の「言」はもともと「辛+口」の形で、「辛」は略されて「立」になる。すると「倍」と字体が衝突する。それで漢代に字体を変更したのだから。  
【侵】 干禄字書と五経文字の正字体は同じ字体。説文篆文の字体の傍は「帯+又」なのだが正(統)字体楷書でも「巾」を略している。「又」を「丈」に書く例も多い。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
俊	俊	俊	俊				俊	俊		俊		俊
		僂										僂
信	信	信	信	信			信	信	信	信	信	信
		僂										僂
		僂										僂
侵	侵	侵	侵				侵	侵		侵		侵
		僂										僂
促	促	促	促	促			促	促		促		促
俗	俗	俗	俗	俗			俗	俗	俗	俗		俗
		僂										僂
便	便	便	便	便			便	便	便	便	便	便
保	保	保	保	保			保	保	保	保	保	保
		僂										僂
		僂										僂

【俗】「谷」の上部はもともと「ハ」が2つ重なったような形。か足のあたりに「ノ」状の曲線がある。これが「子」の左右南北朝時代には下の「ハ」がヒトヤネまたは横線のような形になる。漱石は草書を書いている。  
【保】「人」と「子」に関係する字とおもわれる。甲骨文の字形を明朝体にすれば「仔」となる。金文では「子」のおしり

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俣	また 人①								
侶	リョ とも 人→新①		侶			侶 侶 侶	侶 侶 侶	侶	王勃詩序
俺	おれ エン われ 人→新①		俺					俺	
俱	ク ともに ①	俱	俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	王勃詩序
俱	人			俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	俱 俱 俱	
儉	ケン つつましい ①		儉 儉	儉 儉	儉 儉	儉 儉	儉 儉	儉 儉	羈玉集
儉	人②						儉 儉	儉 儉	
個	コ ⑤常①							個	五經文字
候	コウ そうろう うかがう さぶろう ④常①		候 候	候 候 候	候 候 候	候 候 候	候 候 候	候 候 候	王勃詩序
			候	候 候	候 候	候 候	候 候	候 候	
			候	候 候	候 候	候 候	候 候	候 候	

【俣】通(用)字体の「俠」が使われはじめたのは漢代。  
 【俺】2011年、人名用漢字から常用漢字になった。古い使用  
 例がほとんどない。漱石の『坊っちゃん』も直筆手書きでは  
 仮名で「おれ(連)」と書いている。  
 【俱】第一水準だが、常用漢字でも人名用漢字でもないので人

名には使えない。ただし異体字の「俱」は人名用漢字なので  
 こちらは人名に使える。  
 【儉】中国では使用例が見えない。日本でも江戸よりも前には  
 使用例が見えない。漱石も正字を用いている。現代中国の字  
 体は草書の字体。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
俣												国字
侶	侶	侶	侶			侶 侶		侶				侶 現代中国
			俺 俺									俺 元・趙孟頫 現代中国
俱	俱	俱	俱			俱						俱 現代中国
俱												
儉	儉	儉	儉	儉	儉	儉 儉		儉		儉	儉	儉 天平墓誌 現代中国
			個 個 個 個			個 個		個 個 個 個 個				个 現代中国
候	候	候	候	候	候	候		候 候 候 候 候				候 現代中国

【個】『五體字類』は「箇」と同字としている。『陸軍幼年学校  
 用字便覧』も「箇」と同じ字種としてあげている。現代中国  
 では「個」も「箇」も「个」を使う。  
 【候】江戸より前は「イ+候」の字体。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
俳	ハイ		俳				俳 能	俳 𠄎	伝空海急就草
倍	バイ そむく ます		倍	倍			倍 倍	倍	王勃詩序
倭	ヒョウ たわら								
倣	ホウ ならう								
倭	ホウ					倭 倭			藤原行成
倫	リン たぐい みち		倫	倫	倫	倫 倫 倫	倫 倫 倫	倫	王勃詩序
倭	ワ やまと		倭				倭 倭	倭 倭	五経文字 琴歌譜
偽	ギ いつわる にせ		偽	偽	偽	偽 偽	偽 偽	偽 偽	聖賢指歸
偽			偽	偽	偽	偽	偽		
偶	グウ たまたま ともがら		偶	偶	偶	偶 偶	偶 偶	偶 偶	王勃詩序
倦	ケン うむ		倦	倦	倦	倦	倦 倦	倦 倦	聖武天皇雜集

【俳】楷書(唐代の正字正字を含む)では隣の左側の縦線をはらわずに止める。弘道軒や現代中国の明朝体(宋体)も同様。

【倍】漢代は隣の横線を長くする場所が一定していない。康熙字典では隣の1画目は横線。現代中国では点。

【倭】江戸期よりも古い使用例が見つからない。

【倣】北宋期よりも古い使用例が見つからない。現代中国では「仿」を使う。日本では江戸期よりも古い使用例が見つからない。漱石は草書も使っている。

【倫】隣の縦線が上に出る、出ないの2種の字体がある。説文篆文に倣えば上に出るはず。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
	俳	俳	俳	俳			俳	俳	俳	俳	俳	俳 𠄎
	倍	倍	倍	倍			倍	倍	倍	倍	倍	倍 𠄎
	倭						倭	倭	倭	倭		倭
	倣						倣	倣		倣		倣
	倭						倭					倭
	倫						倫	倫		倫		倫
	倭						倭					倭
	偽						偽	偽	偽	偽	偽	偽
	偽						偽					偽
	偶						偶	偶		偶		偶
	倦						倦					倦 𠄎

【偽】漢代の隸書ですでに簡略化されている。弘道軒が正字なのは意外。漢字整理案で隣の4点が線に略されている。現代中国は草書の字体。

【偶】最終の2画に注目。通(用)字体も正(統)字体も楷書では隣の8画で書いているが、康熙字典では9画。説文篆文の字

体に倣えば8画になるはずだが、1画増やすのが明朝体の様式なのだろう。ところが楷書の弘道軒や文部省活字も康熙字典に倣って9画にしている。

【倦】説文の「券」の項に「今俗作倦義同」とある。干祿字書の「通」の字体が拓本と江戸版本で異なる。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
備	ヒ そなえる そなわる つぶさに 教5常①								杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
									杜家立成
傍	ボウ かたらわ つくり 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傾	ケイ かたむくか たむける 常①								王勃詩序
									王勃詩序
傑	ケツ すぐれる 常①								王勃詩序
									王勃詩序
債	サイ 常①								杜家立成
催	サイ もよおす うながす 常①								王勃詩序
									孫過庭

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考	
備	備	備	備		備		備	備	備	備	備	備	備
	備	備			備							備	備
					備								
					備								
傍	傍	傍	傍	傍			傍	傍	傍	傍		傍	傍
												傍	傍
傾	傾	傾	傾	傾			傾	傾	傾	傾		傾	傾
傑	傑	傑	傑	傑			傑	傑	傑	傑		傑	傑
債	債	債	債				債	債		債		債	債
催	催	催	催	催			催	催	催	催		催	催

【備】旁を「夂+用」を書く異体字がある。「明治の漢字」に「夂+田」を書く例がある。現代中国では「イ」を省略して「夂+田」の字体を使っている。  
 【傍】千祿字書では「旁」と「傍」を〈通〉としている。五経文字では序文に「傍」を使っている。漱石は不思議な字体を書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
傷	ショウ いたむいた めず きず やぶる		傷	傷	傷	傷	傷	傷	傷
			傷	傷			傷	傷	傷
				傷			傷	傷	傷
僮	ソウ		僮			僮	僮	僮	僮
働	ドウ はたらく								
備	ヨウ やとう		備				備	備	備
傲	ゴウ おごる あなどる あそぶ		傲				傲	傲	傲
僂	キョウ	僂	僂				僂	僂	僂
儂	ソウ かたち		儂				儂	儂	儂
僕	ボク しもべ	僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕
			僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕
			僕	僕	僕	僕	僕	僕	僕

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
傷	傷	傷	傷	傷			傷	傷	傷	傷	傷	傷
僮	僮	僮	僮	僮	僮		僮	僮	僮	僮	僮	僮
働	働	働	働	働	働		働	働	働	働	働	働
備	備	備	備	備	備		備					備
傲		傲	傲	傲	傲		傲					傲
僂		僂	僂	僂	僂		僂					僂
儂	儂	儂	儂	儂	儂		儂	儂	儂	儂	儂	儂
僕	僕	僕	僕	僕	僕		僕	僕	僕	僕	僕	僕

【傷】通(用)字体は正(統)字体よりも1画あるいは2画少ない。漱石は不思議な字体を書いている。  
 【働】国字。中国では「働く」の意味に「動」を使う。  
 【傲】2011年の新常用漢字。現代の日本と中国の字体は微妙に違う。弘道軒と現代中国の字体が同じ。

【僕】旁を「業」とする字体が多く書かれてきた。これを干禄字書では〈俗〉とし、「僕」を〈正〉とする。五経文字では「僕」を隸省とし、説文に従う字体を別に挙げている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
僚	リョウ つかさ とも		𠄎	僚			僚僚僚僚	僚僚	王勃詩序
				僚			僚僚		
億	オウ	𠄎 𠄎	億	億			億億億億	億億	聖武天皇雜集
							億		
儀	ギ のり	𠄎	儀	儀儀儀儀			儀儀儀儀	儀儀	王勃詩序
				儀			儀儀		
僻	ヘキ ひがむ		僻				僻僻僻僻	僻僻	瑠玉集
							僻僻		
償	ショウ つくなう	𠄎	償	償償償償			償償償償	償償	
							償償		
儲	チョ もつけ たくわえ		儲	儲			儲儲儲儲	儲儲	王勃詩序
							儲儲		
優	ユウ すぐれる やさしい まさる ゆたか		優	優優優優			優優優優	優優	聾聾指歸
							優優		
允	イン じょう まことに	𠄎 𠄎 𠄎	允	允允允允			允允允允	允允	雅毛筆奉獻表
				允允			允允		
				允允			允允		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
僚僚僚僚		僚僚					僚僚			僚僚		僚僚 北魏・寇謙書誌 現代中国
億億億億		億億					億億			億億		億 現代中国
儀儀儀儀		儀儀					儀儀			儀儀		儀 現代中国
僻僻僻僻		僻僻					僻僻			僻僻		僻 現代中国
償償償償		償償					償償			償償		償 現代中国
儲儲儲儲		儲儲					儲儲			儲儲		儲 現代中国
優優優優		優優					優優			優優		優 現代中国
允允允允		允允					允允			允允		允 現代中国

【億】西周の金文にはニンベンがない。九經字様では説文篆文に倣った字体を挙げ、「億」の字体を隸省としている。  
 【僻】干祿字書の序文と康熙字典の字体が一致しない。唐代の正字と清代の正字の字体が違うわけだ。  
 【償】金文は『金文編』に掲載の例。ニンベンがない。それな

ら「償」ではないかとも思うが、初文ということらしい。  
 【儲】康熙字典には人部の16画にある。  
 【允】古代の字体を見ると、上部は「以、目」に關係するよう  
 に思える。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
元	ゲン カシ も こうべ はじめ								王勃詩序
兒	ケイ キョウ あに								王勃詩序
兇	キョウ おそれる								王勃詩序
光	コウ ひかり ひかる								王勃詩序
充	ジュウ あてる みたく みる								王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
元	元	元	元	元			元	元	元	元	元	元
元	元	元	元	元			元	元	元	元	元	元
兒	兒	兒	兒	兒			兒	兒	兒	兒	兒	兒
兒	兒	兒	兒	兒			兒	兒	兒	兒	兒	兒
兇	兇	兇	兇	兇			兇				兇	凶
兇	兇	兇	兇	兇			兇				兇	凶
光	光	光	光	光			光	光	光	光	光	光
光	光	光	光	光			光	光	光	光	光	光
充	充	充	充	充			充	充	充	充		充
充	充	充	充	充			充	充	充	充		充

【兇】古代の字体が多様。人の手のギザギザは何だろう。金文に櫛のようなものを加えた字があり、包山楚簡にもそれに似た字がある。

【兇】干祿字書では「兇」を〈通〉とし「凶」を〈正〉としている。現代中国でも「凶」を用いる。

【光】唐代の正字と清代の正字(康熙字典)の字体が異なる。

【充】咎なし点がつくことがある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
先	セン さき まず								光明皇后 薬師論
兆	チョウ さざし さぎす								千祿字書 王勃詩序
克	コク かひ よい								孔子廟堂碑 千祿字書 龔普指歸

【兆】古代から現代まで書かれてきた字体は、説文篆文ではなく、説文古文の字体に近い。

【克】説文篆文の字体を楷書や明朝体にしても「克」にはならない。説文解字には古文が2例載っている。康熙字典には古文が5例載っている。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
先	先	先	先	先			先	先	先	先	先	先
粘葉本朗詠	節用	凡4										現代中国
兆	兆	兆	兆	兆			兆	兆	兆	兆	兆	兆
尊門親王	節用	凡4										千祿<通> 現代中国
克	克	克	克	克			克	克	克	克	克	克
粘葉本朗詠	節用	凡5										現代中国
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										
		古文										

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)			説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)		草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
児	シニ 教4 常①											𠂔 𠂔
兒	ゲイ シニ 人②											𠂔 𠂔
兔	トウ ウさぎ 人①											𠂔 𠂔
兔												
兔												
免	メン まぬかれる 炒るす 常①											𠂔 𠂔
免												
党	トウ なかま 教6 常①											𠂔 𠂔
黨	②											
兜	トウ かぶと 人①											𠂔 𠂔
兜												

【児】上部の「白」を早書きしてくずすと「旧」になる。「兒」は「儿」部の6画。

【兔】甲骨文にはたくさんの例があるが、6種類だけ紹介。金文の例がみえない。「兔免兔免兔免兔免」などたくさんの異体字があるが、もっとも多く書かれてきたのは「兔」。五経文

字では「免」の最終画が点ではなく横線。康熙字典では「免」を本字とし、「兔(免ではない)」を俗字とする。「兔」は中国では明代に書かれはじめたようだ。江戸時代は「兔」の使用例が多い。弘道軒が見慣れない字体を採用しているが漱石の字体も同じ。明治時代には普通に書かれていた字体なのかも

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
児	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔 江戸十餘(俗) 現代中国
兒												
兔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔				𠂔 康熙(別字) 現代中国
兔	𠂔	𠂔			𠂔							
兔					𠂔							
免	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	𠂔 干禄(通) 現代中国
免	𠂔	𠂔		𠂔			𠂔					𠂔 包山楚簡
党	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔 現代中国
黨		𠂔	𠂔		𠂔		𠂔					
		𠂔	𠂔		𠂔		𠂔					
兜	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔					𠂔 干禄(通) 現代中国
兜												𠂔 江戸五経(並)

しれない。驚いたことに文部省活字も同じ字体。

【免】当用漢字表の手書き原稿では「免」だったのだが、実際に印刷されたのは上記の字体。さらに当用漢字字体表で変更された。

【党】「党」と「黨」は本来は別の字。

【兜】上部の「白」を、2分割した「白(E+ヨ)」で挟む異体字が漢代からある。楷書の「房山雲居寺石経」は「白」の下に「白」を書く動用字。「白」を「北」で挟む字体もある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)			説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)		草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)		正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
入	ニウ いる いれる はいる	𠂇	𠂇	𠂇	人	𠂇	𠂇	𠂇	入	𠂇	𠂇	入	入
		𠂇	𠂇	𠂇		𠂇							
		𠂇	𠂇	𠂇									
全	ゼン すべて まったく まったくし まとうする	𠂇	𠂇	𠂇	全	全	全			全	全	全	全
		𠂇	𠂇	𠂇	全	全	全			全	全		
		𠂇	𠂇	𠂇	全	全	全			全	全		
八	ハチ やっ やっ よう	𠂇	𠂇	𠂇	八	八	八			八	八	八	八
		𠂇	𠂇	𠂇	八	八	八						
		𠂇	𠂇	𠂇	八	八	八						
公	コウ おおやけ きみ	𠂇	𠂇	𠂇	公	公	公	公	公	公	公	公	公
		𠂇	𠂇	𠂇	公	公	公						
		𠂇	𠂇	𠂇	公	公	公						
		𠂇	𠂇	𠂇	公	公	公						
		𠂇	𠂇	𠂇	公	公	公						

【入】古代には「大」のような字体もあった。居延漢簡では「人」とかわらない書き方がある。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
入	入	入	入	入			入	入	入	入	入	入
元暦萬葉①	節用	入0										現代中国
全	全	全	全	全	全		全	全	全	全	全	全
粘葉本朗詠	農家調宝記	入4			国定教科書					×		干祿<通> 現代中国
												全
												五経<訛>
												全
八	八	八	八	八			八	八	八	八	八	八
元暦萬葉①	江戸方角	八0										現代中国
公	公	公	公	公			公	公	公	公	公	公
粘葉本朗詠	節用	八2										現代中国
	公											

【八】<sup>2</sup><sup>4</sup><sup>5</sup><sup>6</sup>六共兵具

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
六	ロク むい むつ むつ								教1 帯① 王勃詩序
共	キョウ とも								教4 帯① 杜家立成
兵	ハイ ヒョウ つわもの								教4 帯① 瑠玉集
具	グ そなえる そなわる つぶさに								教3 帯① 王勃詩序

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
六												六 現代中国
共												共 現代中国
兵												兵 現代中国
具												具 現代中国

【六】説文篆文の字体はちょっとおかしい？

現代中国も「具」。

【兵】現在の字体で書かれるようになったのは、中国の南北朝期あたりらしい。

【具】中国の南北朝期以降は「具」ではなく「具」と書かれることが多い。干祿字書、九經字樣、康熙字典、文部省活字、

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
其	キ その 人①								王勃詩序
典	テン さかん つかさどる のり 教4 常①								王勃詩序
兼	ケン かねる かねて 常①								王勃詩序
円	エン まるい まどか まる 教1 常①								鄭書指歸
圓	人②								三十帖策子

【其】『説文解字』『甲骨文編』『金文編』に「其」では掲載されず、「箕」として掲載。『甲骨文編』『金文編』などをまとめた『古典文字字典』には「其」は「箕」の籀文とある。白川静は「其」は「箕」の元の字としている。

【兼】楷書では下部が「𠂔」になる字体が一般的。干禄字書の

序文には2種類の字体が使われている。

【円】「円」の字体は中国では使用例が見えない。日本では空海の「三十帖策子」に使用例があり、その後ずっと使われ続けている。「円」は「圓」の「員」を縦線に略してできた字体だと思われる。岩田母型製造所所有の弘道軒四号に「圓」

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
其	其	其	其	其			其					其
其	其	其	其	其								其
其	其	其	其	其								其
其	其	其	其	其								其
典	典	典	典	典			典	典	典	典	典	典
		典	典	典								典
		典	典	典								典
		典	典	典								典
		典	典	典								典
		典	典	典								典
兼	兼	兼	兼	兼			兼	兼	兼	兼	兼	兼
		兼	兼	兼								兼
		兼	兼	兼								兼
		兼	兼	兼								兼
		兼	兼	兼								兼
圓	圓	圓	圓	圓			圓	圓	圓	圓	圓	圓
		圓	圓	圓								圓
		圓	圓	圓								圓
		圓	圓	圓								圓
		圓	圓	圓								圓
		圓	圓	圓								圓

の字体が見えないが、三号にはある。「圓」は楷書では「員」の「口」を「△」または「△」に書く。これは四角の連続を避けて変化をつける意識が働いているのかもしれない。「口」を点2つに略すのは漢代から行われているが、「口」を点2つに略すのは鎌倉時代以降か。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。